

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 朱 洪奎

本論文は高句麗時代の瓦をすべて網羅し、型式分類による編年を行ない、変遷過程を明らかにすることにより高句麗瓦の全体像を提示した点に意義を見出せる。その方法として、瓦当の文様からの分析のみでなく新たに製作技法を加え、この両者を組み合わせることにより、より信頼性の高い編年を構築した。高句麗では、考古学の最も基本となる土器編年は、現状では資料不足のため困難であり、まだ全体の年代の物差しにはなっていない。そこで、多くの遺跡から出土し収集品も多い軒丸瓦が注目され、これによる高句麗遺跡の年代の物差しを作ることが期待されていた。すでに特定の型式の研究はあるが、すべての型式を瓦の実物観察から製作技法も含めて全体像を示した本論文は、その期待に応えるものである。

全体は序論、第1章～第5章、結論からなる。第1章では、これまであいまいだった高句麗瓦と認定する基準を明示した。これにより、収集品や複数の時代にわたる建物の瓦も対象に加えることができるとともに、時代の曖昧な瓦を除外することができた。第2章はこの論文の柱となる部分で、瓦当の主文様を種類ごとに分けて型式編年を行い、時代的変遷（相対編年）を明らかにした。そして主文様の系譜を中国に求め、年代のわかる中国の遺跡から高句麗瓦の実年代を導き出した。さらに異なる種類の主文様の同時性を示す要素として副文様と製作技法をあげて、型式を横断する編年を示した。第1章で高句麗瓦の厳密な基準を設定したため編年に時間的空白が一部で生じたが、曖昧な資料を用いず正確性はこれにより確保できた。第3章では、第2章の結果をもとに古墳と建物遺跡の年代を求めた。例えば427年の平壤遷都の王宮の場所には、清岩里土城と安鶴宮址の二説が出されているが、本論文の編年では年代が合わず両説を否定し、高句麗史に対して見直しを迫るものである。その他にも、これまでの古墳や建物遺跡に対する年代観の変更を提示した。ここまでは瓦当のある軒丸瓦に対しての分析であるが、第4章では瓦当がない丸瓦と平瓦を対象に分析し、軒丸瓦出現以前の高句麗瓦を抽出した。これにより軒丸瓦出現以前の高句麗瓦とその遺跡を示した上で、第5章では瓦の編年をもとに高句麗史を5段階に時期設定し、北魏や隋唐との対外交渉と絡ませて、瓦の変遷が東アジアのなかでどのような意義を持つかについて論じた。

これまで文様と技法によって全体を扱った編年は無く、本論文により学界で議論が可能となる高句麗瓦研究の基礎を作り上げたという高い評価を得た。

全体像を提示することを目的としたため細部において粗削りなところがみられるが、これはその論文の価値を下げるものではなく、今後の新しい発掘や発見による新資料の増加で、内容がより充実されるだろう。よって、審査委員会は博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。